機関拠点型基幹研究プロジェクト
大衆文化の通時的・国際的研究による
新しい日本像の創出

大衆文化研究プロジェクトニューズレター

No. 04 2020

▲　イストリエタ展示で展示された作品の例。左から：

・Ignacio Palencia（イグナシオ・パレンシア）、「Ingratitud（恩知らず）」、1952年
・Jesús Acosta（ヘスス・アコスタ）、「Chupamirto（チュパミルト）」、1928年
・「El Payo: Un Hombre Contra el Mundo（エル・パヨ　世界と戦う男）」、1979年

ごあいさつ

国際日本文化研究センター（日文研）では、2016年度から人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクトとして、「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」と題する研究プロジェクトを立ち上げ、多くの研究成果をあげてきました。昨年度も「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座「大衆文化の発見」INパリ」（2019.10/21-23、パリ・ディドロ（第7）大学、フランス国立東洋言語文化学院（INALCO））や展覧会「メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」」（2019.12/7-2020.2/25、京都国際マンガミュージアム）といった活動を日本の内と外で行い、盛況のうちに終えることができました。今後も新たな催しを展開すると同時に、これまでの成果をさまざまなかたちで国内や海外の学界に積極的に発信し、また社会還元に努めていきます。このニューズレターもその一環として、本プロジェクトの様々な活動の一端を皆さんに届けることを目的として刊行されます。

本プロジェクトは、大衆文化という観点から、日本文化を通時的に、すなわち古代・中世、近世、近代、現代にわたって考察することを掲げています。「大衆」というコンセプトを近代以前に及ぼすことに疑問も生じるかもしれません。しかし、ここで念頭に置かれているのは、文化というものが、個々の独創的な一部の天才やエリートばかりによって作り出されたのではなく、その担い手としてそれを受容し盛り立てた無名の人々の存在が不可欠であるという観点です。本プロジェクトを通じて、日本文化の研究のすそ野が広がることを心より祈念しています。

室長　瀧井一博

目次

ごあいさつ　瀧井一博
活動報告
　古代・中世班　木場貴俊
　近世班　木場貴俊
　近代班　前川志織
　現代班　アルバロ
　現代班　アルバロ
研究紹介　古川綾子

活動報告：古代・中世班

古代・中世班研究会レポート（令和元年度第２回）

木場　貴俊
日文研　プロジェクト研究員

研究代表者：荒木　浩　日文研　教授
開催日時：2020年２月１日（土）、２日（日）
開催場所：国際日本文化研究センター第５共同研究室

グエン・ヴー・クイン・ニュー（日文研外来研究員、ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学）

「日本の教科書に見る俳句学」

日本の小中高で使われている国語教科書の中で俳句がどのように扱われ、また俳句を学ぶことで何を習得させることを目的にしているのかについて報告が行われた。教科書や学習指導要領などから句数や俳人を集計し、その上で古典に触れることや伝統、言語文化を考える機会となることを指摘した。また、現在行われている俳句を用いたアクティブ・ラーニングの実践例の紹介もあった。

李市埈（日文研外国人研究員、崇実大学校）

「「狐女房譚」の変容―古典文献資料から昔話へ―」

陰陽師安倍晴明の出自譚としても用いられている「狐女房」について、古典文献の事例とまた民話・昔話の事例を比較した。狐の詠む和歌や田植えの場面などの有無から検討を行った。

井黒佳穂子（国文学研究資料館）

「『稚児之草紙』の成立－本文の和歌引用をめぐって」

僧侶と稚児の男色を描いた作者未詳『稚児之草紙』について、各話の冒頭に書かれる文章から、モデルとなった人物の特定を試み、それを踏まえて作者を考えた。地名や寺院、性格などからモデルを考え、そうした情報を収集できる人物周辺から作者像を探る内容だった。

会場の様子

活動報告：近世班

近世班シンポジウム
「怪異・妖怪研究の新時代―日文研共同研究を礎に―」レポート

木場　貴俊
日文研　プロジェクト研究員

研究代表者：小松　和彦　日文研　名誉教授
開催日時：2020年1月11日（土）
開催場所：国際日本文化研究センター　第一共同研究室

近世班第2回研究会は、国際拡大研究会として、シンポジウム「怪異・妖怪研究の新時代―日文研共同研究を礎に―」が催された。

冒頭、班長である小松和彦から出席者に向けて、今回のシンポが約20年にわたって日文研で行われてきた怪異・妖怪に関する共同研究の総決算に当たるという趣旨説明が行われた。

続く第一部は、「怪異・妖怪研究の新時代―回顧と展望―」として、内と外の立場から共同研究の回顧と展望する報告が行われた。報告者は、常光徹と山田奨治（日文研）であった。

第二部は、「怪異・妖怪DBの創造―妖怪プロジェクト室かく闘えり」として、怪異・妖怪プロジェクト室に在籍し、データベースの構築・運営に関わってきたメンバーによる報告と討論が行われた。山田奨治を総括・司会に、真鍋昌賢（北九州市立大学）、松村薫子（大阪大学）、永原順子（大阪大学）、飯倉義之（國學院大學）、中野洋平（島根県立大学）による報告が行われた。

第三部は、「日文研と妖怪と私」として、日文研共同研究の参加が自身の研究にどのような影響を与えたのかについて報告が行われた。安井眞奈美（日文研）を総括・司会に、香川雅信（兵庫県立歴史博物館）、佐々木高弘（京都先端科学大学）、近藤瑞木（首都大学東京）、横山泰子（法政大学）、マティアス・ハイエク（パリ大学）が報告を行った。

その後、安井を司会として、総合討論が行われた。参加者からは、中国や韓国、インドなど海外の研究者から見た日本妖怪研究について、また共同研究に参加した立場から20年の日本の妖怪文化の変化についてなどの意見が出された。

最後に小松から、20年前妖怪は周縁的な存在であったものが、注目され、研究やデータベースが評価されたことによって、周縁的ではなくなりつつある。また、多くの人たちが刺激を受け、新たな妖怪文化を生み出していくなかで、妖怪の変質が起きている。そうした中で、これからの怪異・妖怪研究がどのように展開していくのかを見守りつつ、研究に励みたいと感想を述べた。

会場の様子

展覧会『草の根のアール・ヌーヴォー：明治期の文芸雑誌と図案教育』

前川　志織
日文研　特任助教

この展覧会は、明治後半期にアール・ヌーヴォー風図案が多様な印刷物へと一気に広がった状況に注目し、京都高等工芸学校（1902（明治35）年創立）において浅井忠らが担った図案（デザイン）教育、雑誌『明星』（1900（明治33）年創刊）をはじめとする文芸雑誌の表紙絵や挿絵、さらに幻の挿絵画家・一条成美（1877-1910）の諸作品を取り上げ、その関連資料（資料の複製パネルを含む）160点あまりを紹介するものでした。

本展は、図案教育を受けた学生たちの作例と文芸雑誌の表紙絵・挿絵類との比較展示を試みた点に特徴がありました。比較展示を試みた理由として、図案教育を受けた学生作品と文芸雑誌の表紙絵・挿絵類が、いずれも当時勃興しつつあった複製文化における印刷物と密接な関わりをもっていたことがあげられます。また、学生作品では、無名の図案家の卵たちが洋風生活を意識したデザインを試み、文芸雑誌では、著名な美術家ばかりでなく、今ではあまり名の知られない挿絵画家たちも読者投稿欄をもつその誌面を彩りました。これらの点において、名のない人々がその身辺の生活––洋風化による新しい「近代的」な生活––を彩るものとして、アール・ヌーヴォー調を選択したという共通性がみられることも指摘できるでしょう。

会期中は、663名の入場者があり、大衆文化研究プロジェクトの近代および現代チームの協力体制のもと、京都工芸繊維大学と連携し、最新の研究成果の可視化を試みた点において意義深い展覧会となりました。関連イベントでは、ジャポニスム学会との連携により、講演会・ミニレクチャー・ギャラリートークを実施しました。また展覧会に併せて、ミニカタログ『草の根のアール・ヌーヴォー：明治期の文芸雑誌と図案教育』（前川志織編、国際日本文化研究センター、2019年10月）を刊行しました。

多大なご協力をいただいた関係者のみなさまには、この場を借りて改めて感謝申し上げます。

○展覧会『草の根のアール・ヌーヴォー：明治期の文芸雑誌と図案教育』

開催日：2019年10月28日～11月22日

会場：京都工芸繊維大学美術工芸資料館　１階

主催：京都工芸繊維大学美術工芸資料館、国際日本文化研究センター・機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」

監修：大塚英志・国際日本文化研究センター教授

後援：みんなのミュシャ京都展実行委員会

協力：ミュシャ財団、河瀬満織物株式会社

○関連イベント

2019年11月9日（土）13時～16時

講演会「ミュシャ様式とアール・ヌーヴォー再考」

講師：佐藤智子氏（ミュシャ財団キュレーター、「みんなのミュシャ」［於：京都文化博物館］監修）

ミニレクチャー「日本ミュシャ事始め―白馬会の場合」

講師：三谷理華（静岡県立美術館学芸課長）

ギャラリートーク

前川志織（国際日本文化研究センター特任助教）

会場：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

主催：京都工芸繊維大学美術工芸資料館、国際日本文化研究センター・機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」、ジャポニスム学会

展示会『メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」展―民俗文化としての漫画表現―』

アルバロ・エルナンデス
日文研　プロジェクト研究員

日本大衆文化研究プロジェクト・日文研可視化プロジェクトの一環として、京都国際マンガミュージアム・国際日本文化研究センター共同企画展「メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」展―民俗文化としての漫画表現―」を開催しました。

「イストリエタ」は１９世紀から２０世紀にかけて，メキシコで風刺画や娯楽読み物，広告や教育などにまたがる民衆の漫画文化へと広がっていきました。その歴史的なあゆみと多彩なジャンル，そして現在の姿を，19点の作品の原画やそれぞれの時代の雑誌・新聞約100点ともに紹介しました。

詳細は下記の通りになります。

◉展示日時：2019年12月7日-2020年2月25日

○会場：京都国際マンガミュージアム

○共催主催：京都精華大学国際マンガ研究センター、日文研

○観覧者：35,483名（ミュージアム全体の開催期間中の入場者数）

◉シンポジウム：2019年12月7日- 8日

○観覧者：100名程度（1日に50名程度）

◉【ニコニコ美術館@京都マンガミュージアム】番組配信番組：2020年1月20日

○閲覧数：8,594人（生放送の時点）

「イストリエタ」という言葉はスペイン語で「漫画」のことを指します。日本における漫画研究は作者性を中心的に取り扱う傾向があります。メキシコの場合、イストリエタの研究は盛んであると言えませんが、その研究は人類学や歴史学の視点から行う傾向があり、日本とは対照的です。この展示はそういったメキシコの研究傾向を反映し、メキシコイストリエタ文化の大衆性に目を向けました。そのため、本展示は漫画表現を民俗文化として取り扱う視点を日本の漫画文化研究に再導入するきっかけにしたいという目的もあり、日文研・日本大衆文化研究プロジェクトの一環として実施しました。

展示開催日に合わせて、メキシコから、展示企画のキュレーター、アウレコエチェア氏とバルトラ氏、そしてメキシコのイストリエタ博物館館長ソト氏が来日し、二日間にわたりシンポジウムを行いました。アウレコエチェア氏とバルトラ氏は80年代にメキシコのイストリエタ研究の基盤を支えている一つの画期的な書籍（三巻）の作者であり、メキシコ国内外で広く知られているイストリエタ研究の先駆者です。またソト氏は漫画家でもあり、国内外のイストリエタ研究で最も貢献している人物の一人でもあります。彼の運営するイストリエタ博物館は、イストリエタの原画や関連資料のコレクションを最も多く所蔵するメキシコ唯一の博物館です。この3名が揃う贅沢なシンポジウムとなりました。

展示図録に上記3名の研究者の導入的な論文を収録し、展示会場で無料で配布しました。この図録は日本語での漫画比較研究に貢献する貴重な資料となるはずです。

MANGAlabo公開ワークショップ・最先端メディア論講座シリーズ「メディア論、メディア表現とファン文化」

アルバロ・エルナンデス
日文研　プロジェクト研究員

現代班の研究活動の一環として、また2019年度の海外シンポジウムの継続として、「メディア論、メディア表現とファン文化」をめぐる一般公開の国際イベントを、3回に分けて開催した。そのうち2回を日文研で開催した。

講座　1

開催日：2019年8月5日（月）14:30〜18:00

開催場所：国際日本文化研究センター（セミナー室1）

参加人数：50名程度

カナダコンコルディア大学のマーク・スタインバーグ氏、エドモン・ディ・アルバン氏と横浜国立大学の須川亜紀子氏を迎えて、「MANGAlabo7　最先端メディア論講座シリーズ1―メディア論、メディア表現とファン文化―」公開ワークショップが開催された。アニメ・まんが・ゲーム・web等の研究に関心のある学部生・大学院生を含む研究者及び一般の方を対象に、メディア論、メディア表現とファン文化について活発な議論が行われた。コメンテーターとして愛知淑徳大学の松井広志氏の登壇があった。

現代日本の大衆文化の一種であるアニメやマンガが益々注目を集める中、同人誌やコスプレなどのように、このメディア文化を中心にして行われる活動にも注目が集まっている。アニメやマンガといったメディア表現とファン文化を考える際、「商品と消費者」という単純な構造を超え、メディアの性質とその発展、メディア表現の特徴や我々がどのようにメディアと付き合うのかを、考える必要がある。この公開ワークショップにおいては、最先端のメディア論を踏まえ、3名の講師から現代日本の大衆文化におけるメディア表現とメディア使用の接点について議論された。

講座　3

開催日：2019年12月15日（月）13:30〜16:30

開催場所：国際日本文化研究センター（セミナー室1）

参加人数：40名程度

米国デューク大学教授のトーマス・ラマール氏を迎えて「MANGAlabo7　最先端メディア論講座シリーズ3―メディア論、メディア表現とファン文化―」が開催された。メディア研究、アニメ・まんがとキャラクター文化としての妖怪の研究に関心のある学部生・大学院生を含む研究者及び一般の方を対象にして「北米大衆文化研究と妖怪」を中心に議論が行われた。コメンテーターとして伊藤慎吾客員准教授の登壇があった。

今回のワークショップにおいては妖怪・ホラー・メディアというキーワードをめぐって現代のメディア研究と大

メディア論、メディア表現とファン文化

国際日本文化研究センター・大衆文化研究プロジェクト・MANGAlabo 7

最先端メディア論講座シリーズ1

公開ワークショップ

日時…八月五日(月)14時30分—18時（受付は14時から）

場所…国際日本文化研究センター〈セミナー室1〉

使用言語…日本語　一般公開「無料」申し込み不要

【お問い合わせ】国際日本文化研究センター プロジェクト推進室
（電話番号）075-335-2079
（メール）taishu_staff@nichibun.ac.jp
＊ロ文研へのアクセスに関しまして不明の方は、ご確認ください
http://www.nichibun.ac.jp/jp/information/access/

現代日本の大衆文化の一種である
アニメやマンガが益々注目を集める中、
同人誌やコスプレなどのように、
このメディア文化を中心にして行われる
活動にも注目が集まっている。
アニメやマンガといったメディア表現と
ファン文化を考える際、
「商品と消費者」という単純な構造を超え、
メディアの性質とその発展、
メディア表現の特徴や我々がどのようにメディアと付き合うのかを、
考える必要がある。
この公開ワークショップにおいては、
最先端のメディア論を踏まえ、
3名の講師から現代日本の大衆文化における
メディア表現とメディア使用の接点について学ぶ。

講座1
14:30-15:20　休憩 | 15:20-15:30
プラットフォーム資本主義とメディア表現
マーク・スタインバーグ［コンコルディア大学 准教授］
プラットフォーム資本主義とは何か？ プラットフォームはメディア表現にどういう影響があるのか？ この問題を追求しながら、プラットフォームとメディアの深い関わりを検討する。

講座2
15:30-16:20　休憩 | 16:20-16:30
徒歩者とサブカルチャー：オタク文化を歩きながら研究するアドベンチャー
エドモン・エルネスト・ディ・アルバン［コンコルディア大学 博士後期課程］
オタクの聖地、2.5次元文化、などと呼ばれる現象が日本中の街の風景を彩っている中、自分の家からでるはずのない「オタク」が日常生活の空間を征服しつつある。しかし、サブカルチャーのテリトリーをベースにした研究は非常に少ない。
これからのサブカルチャー論、メディア論とファンスタディーズとの新たな文脈に欠かせない「メディア空間の生産」という概念を徒歩文化 pedestrian culture として考察し、オタクの街づくりの歴史とその研究方法に触れる。女性向けオタクメディアの消費者、同人サークル、コスプレーヤーや企業者とともに街を出歩き、Henry Lefebvre の「空間の生産」のメソッドを活用するコツも発表する。

講座3
16:30-17:20
『2.5次元文化』の考察 ——2.5次元舞台とファンの嗜好の共同体を中心に
須川 亜紀子［横浜国立大学 都市科学部／都市イノベーション研究院 教授］
アニメ、マンガ、ゲームの2次元の虚構を3次元の"虚構の身体"で具現化したコンテンツ＝「2.5次元文化」を概観し、特に2.5次元舞台を事例に、ファンの消費と利用を通じての共同体と Intimate strangers をキーワードに考察する。

17:20-17:50
コメンテイター
松井 広志［愛知淑徳大学 創造表現学部 メディアプロデュース専攻 講師］

17:50-18:00
おわり

対象：アニメ・まんが・ゲーム・WEB等の研究に関心のある学部生・大学院生を含む研究者及び一般の方

マーク・スタインバーグ
カナダ・コンコルディア大学准教授、日本の映画・アニメーション、メディア理論。*The Platform Economy: How Japan Transformed the Consumer Internet*, University of Minnesota Press (2019)、*Media theory in Japan*, editors Marc Steinberg and Alexander Zahlten, Duke University Press (2017)「なぜ日本は『メディアミックスする国』なのか」（大塚英志編著・中川譲訳、KADOKAWA、〈IO〉三版）、ほか。

エドモン・エルネスト・ディ・アルバン
カナダ・コンコルディア大学博士後期課程。カナダのコンコルディア大学とフランスのモリ第八大学の共同指導による博士学位を目指す。文化日本の女性向けサブカルチャーにおける町の空間から、オタク文化を再考する。現在、リサイクル文化としてのオタク文化というテーマを活かすプロジェクト Second Hand Kimono において、二次利用、中古販売を始め、サブカルチャーのエコの可能性を論じたいと考えている。

須川 亜紀子
横浜国立大学都市科学部／都市イノベーション研究院教授。アニメ、マンガ、ゲーム などのポピュラー文化におけるジェンダー表象と女性オーディエンス／ファン研究が専門。単著に『少女と魔法―ガールヒーローはいかに受容されたのか』（STAR PUBLISHING〈IO〉三版）、共著に *Girls and Magical Girl Series*（Palgrave Macmillan）、『アニメーション文化55のキーワード』（共用書院）、ほか。『ゆるキャラ®論』（ミネルヴァ書房、〈IO〉）を共著で、ほか。

メディア論、メディア表現とファン文化

国際日本文化研究センター・大衆文化研究プロジェクト・MANGAlabo 7

最先端メディア論講座シリーズ 3　公開ワークショップ

2019年12月15日（日）13:30—16:30［受付は13:00から］

場所：国際日本文化研究センター（日文研）〈セミナー室1〉　使用言語：日本語　一般公開［無料］　申し込み不要

対象：メディア研究、アニメ・まんがとキャラクター文化としての妖怪の研究に関心のある学部生・大学院生を含む研究者及び一般の方

妖怪・ホラー・メディア。この三つのキーワードをめぐって現代のメディア研究と大衆文化の姿を検討することができる。今回のワークショップにおいては、メディア学からアニメや漫画文化の研究を行っているトーマス・ラマール氏が、メディアとしての妖怪文化について講義を行う。ラマール氏のメインセッションに合わせて、〝メキシコの漫画文化〟と〝日本のアヴァンギャルドにおける妖怪〟の発表を行い、メディア表現の展開の中で「恐怖」または「不思議」を表現する大衆の想像力にスポットを当てる。最先端のメディア論の動向もこの視点から窺うことができる。

講座
13:30-14:30　休憩 | 14:30-14:45
メディアとしての妖怪
トーマス・ラマール Thomas Lamarre［デューク大学教授］
メディア学からアニメ、マンガやメディアミックスを研究するトーマス・ラマール氏が、メディア学の視点から妖怪文化に焦点を当てる。今回の講座では妖怪に対しどのようにメディアとしてアプローチできるのか、北米の最先端メディア理論からみた日本大衆文化を考察する。

発表1
14:45-15:15　休憩 | 15:15-15:30
メキシコ漫画イストリエタにおけるホラーの表現
アルバロ・エルナンデス Álvaro Hernández［日文研プロジェクト研究員］
「イストリエタ」と呼ばれているメキシコの漫画は30年代から80年代にかけて大衆メディアとして広がった。ホラーの表現も、このメキシコの大衆漫画文化において独特な形で展開され、ポピュラーなジャンルとなった。この発表では、メキシコのホラー漫画の特徴とその表現について紹介する。

発表2
15:30-16:00
妖怪・変身・アヴァンギャルド
大塚 英志［日文研教授］
手塚治虫の妖怪観を手掛かりに「変身」「擬人化」「改造人間」「クローン」と言った戦後のキャラクター造型の基調にあるイメージの出自がアヴァンギャルドや戦時下のメディア理論によって「つくられた」ものであることを確認する。

総合討論
16:00-16:30
伊藤 慎吾 コメンテーター［日文研客員准教授］

講師
デューク大学教授
トーマス・ラマール
Thomas Lamarre
アニメーションや漫画を取り扱う日本の現代大衆メディア文化研究の中で、カナダの研究者トーマス・ラマール氏はメディアの特徴を重視する新鮮なトレンドを形成してきた。代表的な著書として『アニメ・マシーン——グローバル・メディアとしての日本アニメーション——』（名古屋大学出版会 2013）（*The Anime Machine: A Media Theory of Animation*, 2009）と *The Anime Ecology: A Genealogy of Television, Animation, and Game Media*, 2018 が挙げられる。

衆文化を検討した。メインセッションとして、メディア学からアニメや漫画文化の研究を行っているトーマス・ラマール氏が、メディアとしての妖怪文化について講義を行い、メディア表現の展開の中で「恐怖」または「不思議」を表現する大衆の想像力にスポットが当てられた。他に大塚英志教授による「日本のアヴァンギャルドにおける妖怪」の発表、アルバロプロジェクト研究員によるメキシコ漫画におけるホラー表現についての報告も行われた。

浪曲SPレコード デジタルアーカイブ公開

古川　綾子
日文研　助教

https://kutsukake.nichibun.ac.jp/rsp/

明治30年代から昭和30年代までに出版された約1万枚の浪曲（浪花節）SPレコードのデジタルアーカイブを6月24日に新規公開します。明治36（1903）年2月の英国グラモフォン社による日本初のレコード録音「ガイスバーグ・レコーディングス」に含まれる、浪花亭愛造の浪曲（浪花節）SPレコード「後藤伏太郎の伝」「東京より東海道駅名尽し」はじめ貴重盤も多く、量的にはSPレコード音源公開では国立国会図書館の「れきおん」に続きます。

著作権保護期間満了分の音源（全体の約40%）、全レコード盤面画像、番付・ポスター等の関係資料画像をインターネット公開します。著作権保護期間中の音源は日文研所内限定公開（非公開）とし、

利用申請が認められた利用者には、図書館にてローカル版データベース(HDD)での視聴を可能にしました。

浪曲SPレコード・デジタルアーカイブは、浪曲SPレコード収集家の森川司氏(1923—2014)から寄贈されたSPレコード13,013枚、LPレコード187枚、計13,200枚のうち、重複分を除いた　SPレコード9,998枚の画像と音源の電子化及び公開、並びに日文研所蔵の浪曲関係資料の電子化及び公開を目的としています。平成26(2014)年3月に寄贈を受け入れ、「機関拠点型基幹研究プロジェクト・大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」(2016-2022年度)の成果として公開することを目指して、資料の電子化及びデータベース化に取り組んできました。

SP音源公開では、国立国会図書館の「れきおん」(約25,000枚分)が質量ともに知られていますが、森川コレクションと「れきおん」の重複は7%(668枚分)にとどまるため、浪曲に特化したSP音源公開の意義は大きいといえます。電子化機器の導入に時間を要し、専従スタッフの確保も困難であったことから、2020年3月末時点の音源電子化状況は57%に留まります。さらに新型コロナウィルス感染拡大防止のため、公開直前の電子化の追い込み作業に影響が出ましたが、公開後も電子化を継続し、2ヶ月毎に更新を予定しています。

【経過報告】

2015年度	担当者着任(10月),画像の電子化作業,関係機関への聞き取り調査
2016年度	著作権(浪曲師・台本作者等約500名)調査含むデータベースシート作成開始, 音源電子化機器が揃い作業始,クリーニング及び長期保存用備品交換,収蔵棚設置
2017年度	浪曲関係資料収集開始(書籍等),ウェブ版とローカル版の試作版データベース構築(3月末)
2018年度	試作版データベース改訂(異字体同一視検索機能追加等)
2019年度	試作版データベース改訂(ローマ字検索,レーベル検索等)
2020年度	6月24日「浪曲SPレコード デジタルアーカイブ」公開

【レコード検索項目】

演者名(浪曲師)	漢字(旧字体・新字体)、読み仮名(ひらがな・カタカナ)ローマ字に対応
曲名(浪曲演題)	漢字(旧字体・新字体)、読み仮名(ひらがな・カタカナ)ローマ字に対応
レーベル	「その他」含む一覧から検索
レコード番号	レコード番号で検索
提供制限(音源)	著作権保護期間満了分はインターネット公開、それ以外は日文研所内限定公開で検索

【レコード画像・音源】

画像(レコード盤面)	解像度(300dpi/24bit),保存用TIFF(平均35MB),公開用JPEG(平均2MB)
音源	サンプリング周波数(96kHz),保存用WAV(平均120MB),公開用MP3(平均5MB)

機関拠点型基幹研究プロジェクト
大衆文化の通時的・国際的研究による
新しい日本像の創出

大衆文化研究プロジェクトニューズレター

No. 04 2020

タイトルデザインの図版の原典は左からの順で以下の通りです。

1)「福冨長者物語」
神谷詮敬(1775年写)日文研所蔵

2)「百鬼ノ図」
伝土佐光吉 (1539-1613)日文研所蔵

4) 「絵葉書世界」第14号より、日文研所蔵

5) 山路亮輔 (2015年)「縦スクロールまんが」より

大衆文化研究プロジェクトニューズレター
(No. 4: 2020年06月30日発行)

発行: 国際日本文化研究センター
プロジェクト推進室

前川　志織　特任助教
木場　貴俊　プロジェクト研究員
アルバロ・エルナンデス　プロジェクト研究員

〒610-1192京都市西京区御陵大枝山町3-2
tel: 075-335-2079
fax: 075-335-2090
e-mail: taishu_staff@nichibun.ac.jp
http://taishu-bunka2.rspace.nichibun.ac.jp/